えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑⑨

小指の血 出し合い贈る

血書の鉢巻き「桜花」



特攻の命が下った島津良雄さんに女学生たちが贈った血書の鉢巻き ＝県歴史文化博物館蔵

戦後81年の夏。今回はある特攻兵士が遺した鉢巻きを紹介する。

特攻兵士だったのは西予市野村町の島津良雄（りょうゆう）さん＝1921～2020年。曹洞宗安隠（あんのん）寺の長男に生まれ、駒沢大学在学中の1943（昭和18）年に学徒出陣した。

12月に長崎県佐世保市の相浦（あいのうら）海兵団に入団した島津さんは、水兵としての基礎訓練を受け、翌年2月に土浦海軍航空隊（茨城県土浦市）に飛行専修予備学生として転属、グライダーの操縦や爆弾投下の機械操作を習った。続いて5月には徳島海軍航空隊（徳島県松茂町）に転属、実機で爆弾投下や機銃の訓練を行った。

徳島海軍航空隊で少尉に任官後、島津さんは希望機種の調査で戦闘機と書いた。ところが特攻希望がいないことに隊長が激怒。その後、同期が各地に配属される中で、島津さんは4度特攻を志願した。しかし、隊長は特攻要員の教官を命じ、45年6月に油壺特攻基地（神奈川県三浦市）に転属し、特攻要員に精神教育を行った。

そして8月10日、ついに島津さんに特攻の命が下り、横須賀へ転属を命じられた。搭乗機は「桜花（おうか）」。全長約6㍍、全幅約5㍍、胴体はジュラルミン製、翼は木製、爆薬1・2㌧とロケット3本を搭載した特殊滑空機である。

プロペラも車輪もなく自走できないため、母機の一式陸上攻撃機につり下げて敵艦に迫り、分離後はロケットで加速、滑空して体当たりした。しかし、桜花の重量で母機の運動性が低下し、母機ごと撃墜されることが多かったようだ。

島津さんは相模湾に来襲する米艦隊を迎撃するため、8月13日から出撃態勢に入った。その際、女学生たちが小指に針を刺して血を出し合い「桜花」と血書して贈ったのが本資料である。「白バラ」とクラス名も記されている。

女学生たちが特攻兵士の身の回りの世話をした例は多く、横須賀でも同様だったのだろう。島津さんは3日間出撃態勢をとっていたが、米艦隊は現れなかったため、出撃せずに15日の終戦を迎えた。

島津さんはどのような思いで血書の鉢巻きを締め、出撃に備えたのだろうか。

「散る桜 残る桜も 散る桜」は良寛の句とも伝わるが、散って咲くことを命じられた心理は想像を絶する。戦後、島津さんは僧侶として戦没者の冥福を祈り平和を訴えた。本資料を通じて、その思いを継承したい。

（専門学芸員・平井誠）

〈随時掲載します〉

× ×

「血書の鉢巻き」は県歴史文化博物館のテーマ展「昭和100年 昭和の風景を振り返る」で31日まで展示中。

掲載許可番号：d20230301-04